



「ミス Ms.」が常識になりつつある米国推理小説界 門 更 月

以前この会報(1993.3.発行138号)でお勧めしたシカゴの女探偵 V.I. ウォーショスキー・シリーズの推理小説(作者サラ・パレツキー)に関する おもしろい データを見つけたので紹介したい。そのデータは 西尾忠久著『ミステリーがちょびり好きな友へ』(東京書籍)の第1章『<ミス>の敬称』に詳しく述べられているのだが、ここでは要点だけまとめておこう。

もともと<ミス>という呼称は「既婚・未婚の別なく用いる 女性の敬称」として 1920年代(一説には 1940年代)からアメリカで 特に秘書の間で使用されていたが、ここ 20年ほどは「既婚・未婚がはっきりする<ミス>や<ミセス>は女性が男性との関係で 規定されるという性差別文化に属しているから<ミス>に統一 すべきだ」というフェミニズムの立場から女性たちに敬えて使用 されてきたものである。それをもちよよく象徴しているのは、 1972年にアメリカで出版された『ミス』という女性向けの雑誌だろう。



そこで V.I. ウォーショスキー(ヴァイク)・シリーズの 1982年の第1作から 1992年の第7作までの ヴァイク(離婚後 目下1人で暮らしている)に対する敬称を調べてみると、自他ともにある時は<ミス> ある時は<ミズ>と呼んでおり、最初の方では<ミス>派が<ミズ>派を上回っていた。しかし、 次第に<ミズ>派が増え続け、第5作めでは、<ミズ>派が逆転勝利した。ところが第6作 ではなぜか<ミス>派が増加して再逆転しているのに、最新作の第7作では、なんと<ミス> という呼称がまったく消えてなくなり、全編これ<ミズ>一色倒になっている。この間に作者 パレツキーにどんな意識の変化が起きたのか? はっきりしたことはわからないが、近年、 パレツキーに遅れをとらじとミステリー界に次々と登場したたくさんの女性作家たちの作品に <ミズ>が多く使用されていることも影響しているのではないだろうか。第一、主人公の女 探偵たちのほとんどが離婚経験者なことから、<ミス>からいったん<ミセス>になった女性 がまた<ミス>に戻るというのはおかしい話だということも説得力がある。例えば、ボストンの 女私立探偵カーロッタは第1作(作者リンダ・バーンス)で次のように言っている。

わたしはミズ・カーライル、そしてときにはミス・カーライルだ。もっとも ただの知り合い 程度の間柄の人間にとって、わたしが 既婚者なのか未婚なのか、はたまた離婚経験者なのか そんなことがどんな意味があるのか、わからないが。結婚していた時ですら、わたしはミセスを 名乗らなかった。……

ミズというのは気に入った。わたしの場合名前の前になにをつけるか、いざさかあいまいな状況なのだ。厳密に言うと1度結婚したことがあるからミス・カーライルではない。それにミセス誰れでもない。別れた夫の名字を自分の名字として使ったことは1度もない。-----

なお、日本で翻訳される場合は長い間「ミス」も「ミセス」も「ミズ」も「〇〇さん」で一括されてきたが、ここ4、5年、女性翻訳者が急速に増えてきたことと相まって（ミステリー分野では42%）、最近では敢えて「ミズ」とそのまゝ翻訳する例が多くなったらしい。

「1983年の調査では米国民の3割が「ミズ」の敬称を容認しているという。今ではもっと増えているだろう。」

またイギリスでも1987年の男性作家による推理小説で「ミズ」が使われているというのだ。イギリスでも「ミズ」の敬称が使われはじめているのだらう。「ドイツ・イタリア・ロシアではどうなのだろう。」と著者（西尾氏）もまだ着手したばかりで、全体像はつかめていないようである。

と、まあここまでは、西尾氏の著書を簡単に紹介してきたが、以下は私見を少し述べてみた。

ところで、日本ではどうなのだろうか。日本には「ミス」や「ミズ」のような敬称はないが、「ミセス」に対応するものとして「〇〇夫人」というものがある。しかし、これは一部の人物や特定の場面に使用されることが多く、あまり一般的とはいえないだろう。

それよりも日本の場合は、やはり夫婦別姓の自由化、世帯主や保護者の欄とか、女性の姓名の前に何をつけるかではなくて、1人の独立した人間として女性の人格を表わす名前そのものが軽視されていることに問題があるのであって、私たちが取り組む課題は多い。

月刊 婦人展望

の記から～

奈良 保育所入所に母のいない理由を書面調査し、権原市で、市立保育所への入所希望者が市に提出する申請書の中に「母親がいない場合」との項目があり、その理由を、「死亡」「行方不明」「拘禁」「生別」「別居」の五つから選択記入させていたことが七月二十七日分かった。弁護士や母親から「プライバシーの侵害ではないか」との指摘があり、表現が不適切だったと認めた市は、できるだけ早くこの項目を除いた書式に変えるという。（7・28 朝日新聞）



地方

どうして市立保育所の入所に「母親がいない場合」と「母親が働いている場合」というのがあるのだろうか？ 保育は必ず母親がすべきもの。どうしてもだめな時保育所だ」という根本思考がめざめざある。子供の数が少なくなっている。子供どうしの出会いの場として保育所が大切なのかな。



あけまして おめでとうございます
新しい年のはじめ。ぼろぼろ-おん達も元気に話し合ひ。



15年前の私の就職の時のこと。

私は記者になりたかった。あらゆるマスコミを受けて全部落ちた。丁度杉山ショック後の就職難の最中だった。努力が実れば男女、笑にみられると思込んで学生生活を送ってきたのに、朝日新聞社以外は全て「女はいる」と言われた。「何故ですか」「女は深夜業が出来ないと男は差でまわっている」とこめられた。

M.H.K.を受験しに行くと、会場で突然男と女に分かれた。男はすべての職種をえらべるのに、女はアソシエイトと編集だけ。「すてな方に〇を付けるわ」と言われ、報道記者志望の私はアソ！と落ちた。男は7つの職種、女は2つ。女は奴らウツリが面白いから、インゼンライトを当てられた。

今、女もニュースがめつるやうなやとやふと女は美人ばかり。男はブスにやては〇.K.

某英社、2人採用に3,000人があつた。入りきらずに明治大学の校舎でテストがあつた。

早川書房、採用試験を受ける時、親の写真と出させられた。重役以上のコネがある人だけ採用された。

しみじみ私生活の存在だと思ふ。

卒業の時、同級生の内16人の女子学生、その内就職が決まっている人は4人。男子は全員決まており、私の成績の悪い男子はM.H.K.に入社した。

全優、やまの海に女子に職がなく、ほとんどの男子はマージャンで遊んで男子が採用される現実。同級生でも、不可ばかりだった男子は三井物産に入社し、1年後の4月にはモスクワ勤務。その後大企業に次々と入社している。同じクラスで全優で入社した女子はコネ取りの毎日、25才で肩たたきあり、27才、28才と、いやみを言われつづけて止められた。35才でようやくモスクハ。男は1年、女は13年で評価するのさ！

その後も「女はレイトが作れないうさ。早く行って主任になれ」と今言っている。


採用試験に落ちつづけた事により、だんだん物が売られなくなり、ついに果ては長崎へ帰る味なショックの大きさが明瞭に出ては来のだ。



昨年4月、朝日新聞に入社した後輩女性も出席していた。

今、朝日の長崎支局は男7社、女2の割合。

とにかく行動し、仕事をし、発言すること。現成事業を作ることにがんばっている。と話していた。

 「=男の仕事をするのは女」ってこれが本題なの？



中国人の女性が発言した。

言われる前にコトコトと=男、現実的な仕事をする女で、日本独特なのかしら？

日本の女性で結婚して仕事をやめるという。中国の女性は仕事をやめる。1人の給料では足りないので、同じに働いて給料も同じと図が描かれている。一生仕事する女。だから社会で同等になる。だから女が男とツラツラしない。



職場でも男と女と働いていて大切仕事には全然意見を言わぬ女が多いとされる。

いつも働いている女がよい人間。免職している女は悪い人間というイメージが職場にもある。

子供が病気で、その職場の悪評がやがて来る。どうして又の職場にやめるの？



医学部の医局の中でも女がお茶飲みをしている。

女の方から「何で女にお茶飲みをさせるのですか」と言うと、それでも「女がしてくれ」という男は、男が以下しかない。「良い雰囲気で行きた」と考える所に問題があるのではないか。

敵対関係になる男が仲々女には慣れて来ない。社会的状況がある。

セクハラ・ハラスメントが起る原因の1つも、その悪く関係にない。どのお茶飲みが働かざるを得ない、という所にあるのではないか？

自分が働く労働に見合う賃金ももらっていない。お茶を飲む事は賃金に入っているか、考えてみよう。



アメリカに留学している息子が土産に持て来てくれた写真集。すばらしい。

「アメリカを愛した黒人女性の写真集」というタイトルで、すばらしい。若い女性ばかりの写真集だった。今、私は公立中学の英語教師をしているけれど、中学生では断然女が強い。勉強も男よりよく出来る。そして大人、負けず嫌いな。

そんな中学生が社会に出て変わってしまう。あの様子を女の子はどう思ったのだろう。あれだけ男子学生を制圧していたのに、どうしてああ変ってしまうのだろう。



長く勤めたいと思えば表面、男とうまくやらなくとクビにあってしまう。女が敵対するの、現実にはとてもむずかしい。私の所も職場の人数比は男4対女3人。女は3人しかいない。女同士でも考え方がちがって折角にやるしかない。

日常生活の中で少数派であるとなかなか敵対は出来ない。

男の人は未だ逃げ道を作っている。「女は命令している。あなた方がやりたくないじゃないか」。男事だ、男に勝つには男は負けよう、男の男。